

熊ノ郷

経済

間違いで、黄熱病の原因はウイルスでした。当時は電子顕微鏡などありませんでしたから、ウイルスが見えないのはしかたなかったんですね。野口英世のような天才が研究にすごいエネルギーを注いでも、それを支える技術が発達していないと得られる成果には限界があるということです。これまでセマフォリンが免疫の細胞をナビゲートしているなんてことは想像の域でしかなかったのに、こうした最新のイメージング技術を使うことで、それを見て確かめることができるようになりました。

=1番になる意味

堀井 人体の細部のしくみが明らかになっていくのは、本当に興味深いですね。こうした世界のトップの研究や技術開発が、日本とりわけ大阪から発信されていくのはじつに素晴らしく夢のあることだと思います。

熊ノ郷 ところが最近、政府の事業仕分けで「2番じゃだめなんですか」なんて言われてしまう時代ですからね。

堀井 学術研究や知的創造の世界では、1番と2番が得る権利や利益には雲泥の差があります。これが国家レベルの競争となると、国民の将来にかかわる大問題ですよ。

熊ノ郷 二番煎じが特許として認められるなんてあり得ません。医療も同じで、2番の日本が1番の国の医療技術を使おうとすると、そこに対して特許使用料を支払わなければなりません。2番手に甘んじてい

ては、いずれ大きな国民負担となって跳ね返ってくるでしょう。だから誰も知らない、できないことを、最初にするのはとても大事なことです。

堀井 日本の研究者たちが先進諸国に伍して科学研究や技術開発にしのぎを削っているのは、一番でなければならないからでしょう。「2番じゃだめなんですか」などというのは、愚問というしかありません。

熊ノ郷 資源の乏しい日本では、世界に誇る特許を多く持つことはとても重要です。ところが国が本気で科学技術研究を積極的に支援する姿勢を見せないから、研究者たちは夢をもって仕事に打ち込めない。若い研究者の研究環境は非常に悪いです。

堀井 どのように悪いのですか。

熊ノ郷 いま企業の派遣切りが問題になっていますが、研究者の世界も同じです。研究職のポストに就いても3年や5年単位で更新されるし、一回きりの更新も多い。そうなるとローンも組めない生活を強いられてしまいます。研究者がそんな己の身の安住を考えて仕事をしてはいけなないのですが、就労条件としては非常に悪いですね。また、2年や3年で成果を出そうとすると、最初から結果の見えている研究に手をつけてしまいがちです。そうすると夢のある研究ができないですし、世界を驚かせるような成果も期待できません。

堀井 短期的、数量的な成果が重視され、それが政府の事業仕分けにみられるように、国民の人気取りのパフォーマンスになっていることに危惧を覚えます。こと学

術研究や文化振興を数字で測るのは間違っています。

熊ノ郷 たとえ1、2年の誤りであっても、研究の世界では、それが10年先に影響してきます。学問や技術開発というのは、ある程度継続して師匠から弟子へと代々伝えていくもので、それが途切れてしまうと取り返しのつかないことになってしまうでしょう。日本の航空機開発のように、非常に優れた技術をもっていながら、戦後の政治的な理由で開発力が途絶えてしまった例もあります。

堀井 今年ノーベル化学賞を受賞した根岸英一氏(米国バドュー大学特別教授)と鈴木章氏(北海道大学名誉教授)のお二人は、30年以上前の研究が評価されました。当時の日本は科学技術立国を掲げて邁進していた時代ですが、その成果が世界に認められるようになるまで長い時間が必要だったんですね。

熊ノ郷 科学技術の20年後、30年後を見据えた舵取りをしてもらいたいものです。

堀井 根岸教授は、「研究とは、人がやっ

